

図書館デビュー

松林優子

カウンターに、もみじのような小さな手。
背伸びしやっとのぞいた男の子が、「はい！」と、絵本を差し出した。ほほえまずにいられない。
「いらっしやい」と、思わず立ち上がって本を受け取った。

母親が、小走りで乳母車を押しながらやって来た。赤ちゃんが眠っている。
別府市立図書館は平成十九年度から、コンピュータシステムを導入した。電算化を始めて、ようやく二年目に入っている。

男の子の母親が、「この子の貸し出しカードを、作ることが出来ますか？」と、言った。身分を証明できるものがあれば、何歳からでも発行できる。母親は嬉しそうに保険証を出してくれた。
今日が、この男の子の“図書館デビュー”である。

当館の所蔵は約十一万冊。他館と比べてけっして多くはない。しかし、私たち職員でさえも目にする本はほんの一部だ。返却本の点検で再発見することも多い。原爆投下直後の写真集は、何度見てもショックだ。

別府市立図書館の職員は、わたしを含め十五人全員が戦後生れ。戦争体験者は一人もいない。戦後の貧しさは語る事が出来る。しかし、このページから見える現実を、伝えることはむずかしいように思う。平和のありがたさに気づく材料が、ここ図書館にはある。

きょうから、市内の中学生が職場体験にやってきた。どの生徒も初仕事としての緊張をかくしきれない。学校現場からのいろいろな課題があるようだ。しかし、図書館が平和の象徴であることも感じ取ってもらえたらと思う。

図書館デビューを果たした男の子は、絵本を嬉しそうに両手に抱えた。母親のバックには入れようとしめない。もう一人前の男の子だ。「またきてね」と、声をかけると、「うん！」と言ってうなずいた。

帰り際、赤ちゃんが「バイバイ」と乳母車の中から手を振ってくれた。いつの間にか目を覚ましていたようだ。この子の図書館デビューも、もうすぐかもしれない。

どうかこの子ども達も図書館ファンの仲間入りをしてくれますようにと、願わずにいられない。また会う日を楽しみにして、カウンターから見送った。

(まつばやし・ゆうこ 別府市立図書館)

